

Funehiki High School News vol.72

◆PTA 奉仕作業



6月22日、前期のPTA奉仕作業が行われました。当日は多くの保護者の皆様にご協力いただきながら、総勢約200人で校庭の除草や土手の草刈りを行いました。部活動前の有志の生徒たちも、保護者の方と一緒に額に汗して作業に取り組みました。

早朝からの作業にもかかわらず、奉仕作業に参加してくださった保護者の皆様に改めて御礼申し上げます。



◆就職活動が本格的にスタート

7月1日に求人票が公開されました。今年の特徴としては、①昨年度同時期に比べ、建設・建築、介護関係を中心に求人数が増加している、②企業側も採用活動を早めている、という点が挙げられます。就職を希望する3年生約90人は、既に模擬面接指導やSPI(適性検査)対策講習会などを通して、就職試験に向けた準備を進めています。



また、7月9日には郡山公共職業安定所のジョブサポーターから、希望職種の決定の仕方や企業選択のポイントなどについて、個人面談の中で助言を受けました。この面談は、

まだ応募する企業を決めていない生徒にとって、自分の将来を考えるよい機会となったようです。面談終了後には、求人票を真剣なまなざしで確認する生徒の姿が多数見受けられました。7、8月には各企業で応募前見学が行われます。生徒はこの見学を通して、自分が受験したいと考えている企業の業務内容を把握します。生徒一人一人が自分の良さを生かせる職場を見つけることができるよう、学校としても応募前見学をはじめとした各種事前指導に力を入れていきたいと考えています。



◆選手壮行会



期末考査最終日の7月4日、福島県総合体育大会をはじめとする県大会や各種大会に出場する部活動の壮行会が行われました。野球部・サッカー部・卓球部・陸上競技部・ソフトテニス部の代表が大会に向けての決意を述べ、全校生徒でエールを送りました。

◆携帯電話安全教室を開催

7月10日、福島県警察本部サイバー犯罪対策室から講師を招き、携帯電話安全教室を実施しました。「サイバー犯罪」とは、コンピューターやインターネットを利用した犯罪のことです。多くの生徒が利用しているLINE(パソコンや携帯端末を利用した連絡手段の一つ)やそれによるトラブルを防ぐ設定の方法などについて話が及ぶと、生徒たちも真剣な表情で警察の方の説明に耳を傾けていました。学校としても、生徒がサイバー犯罪の被害者、加害者にならないよう、正しい判断ができる知識を身に付けさせていきたいと考えています。



3月11日以降の田村市での生活

Celeste Laser
セレステ・レイサーさん
(アメリカ合衆国
オハイオ州出身)



海	を	越	え	て
英	語			
	指	導	助	手
ペ	ン	リ	レ	ー
			No.	2

2011年3月11日、恐ろしい悲劇が東北の東海岸を襲いました。午後2時46分に起きた地震と津波で多くの人々が家族や友人を失いました。地震が起きた時、私は日本に来てからほぼ一年が過ぎようとしていました。この惨状から、この国が自分自身で立ち上がることができるのか、どのようにして前に進むことができるのだろうかと全世界の目が向けられました。私の目から見た3.11以降の日本についてお伝えしたいと思います。

牧公介若草学園理事長は、私たちの安全が第一と考えて帰国の準備を整えてくれました。市内の小・中学校の英語指導助手は、3月22日に日本を離れアメリカに帰国しました。私たちは暮らしていたこの場所で何か役に立ちたいと強く思っていましたし、帰国したらいつ戻ることができるのかも分からなかったのが、田村市を離れることがとても悲しかったです。私は1カ月半アメリカにいました。その間の私の唯一最大の願望は船引に帰ることでした。日本の友人、生徒、共に働いていた人たちのことが本当に心配でなりません。日本に帰っても安全であると米国で宣言された時の私の喜びは、とても言葉で表せないほどでした。

私たちが帰ると、多くの方が日本に戻ったことを感謝してくれました。その気持ちや多くの親切な心に私は本当に感謝していますが、私にはもっと伝えたいことがありました。それは田村市の人々が踏み留まって、この地域が存続するように努力したことがいかに勇気あることかを伝えたいのです。多くのものを失った人々の痛みを私も感じていることを伝えたいのです。以前にも増して私が子供たちやこの地域社会をもっともっと好きになり、愛していることを伝えたいのです。数週間が過ぎていくうちに、人々がどれほど互い

に強く結ばれているかを知って驚かされました。市全体に希望と力の精神が満ちていました。災害に直面すると、疲労や悲嘆に沈んでしまうことがあります。しかし日本の人々の中にそれを見ることはありませんでした。私は災害に立ち向かう決意と勤勉な姿を見ました。あれから2年が過ぎましたが、日本に帰って来た時に見た人々の強さと希望を今も私は見えています。すべてが元通りになったかのように見えます。人々は仕事をし、買い物に行き、畑を耕しています。子供たちは日曜日に外で遊び、公園で疲れるまでサッカーをしてうれしそうです。私たちは暑い夏に向けて準備をし、家族や友人とのバーベキューや楽しい時間を想像しています。放射線量計はまだ私の目を引き付け、この地域社会に起きた全てのことを思い出させますが、それでも人々は前に向かって進んでいます。

遠くから響いてくる地震の地鳴りを聞くたびに私の心音は速まります。田村市の人々も同じだと思います。それは私たちが完全無敵ではないことを思い出させます。私たちは不死身ではありません。しかし人々が体験した災害による心の震えの後に来るものは、家族や友人のために強い心を持つ決意だと私は信じています。

震災後に日本に帰ってきた私たちが頂いたすべての感謝の言葉に心から御礼申し上げます。私は私個人の感謝を表したいと思います。私たちの市の安全を守り、繁栄させるために全力で取り組んでくださっている田村市長様に感謝申し上げます。恐怖心にとらわれず、結束し、日々強い心で生活に取り組むことを私に教えてくださったこの地域の人々に感謝申し上げます。皆様の強さと明るく前に進もうと努められていることに感謝申し上げます。私は田村市に住んでいることをとても誇りに思っています。